

歴史的な話

著者	江口 一久
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	45
ページ	594-595
発行年	2003-12-26
URL	http://doi.org/10.15021/00001824



歴
史
的
な
話

266 男と人狩

ちいさなお話、ちいさなお話。世間話、世間話。

そのころ、ルッゲレ・サデイ村（北西カメルーンにあるナイジェリアとの国境にある村）で人を売っていた。この村はカヌリ語でグンジュキという。グンジュキ村はガシガ村のちかくである。そのころ、人狩があった。男はよめさんをもっていた。男がすんでいる場所から男がいこうとしている場所は、ここから（この話がかたられしている場所）ドウ・マーヨくらい（数キロメートルある）のところにある。そこには野原がある。

さて、男は半ズボンをはき、シャツをきて、杖をとり、肩にかけた。よめさんは男をつかまえて、男に、「どこにいくのか」といった。男は、「夜遊びにいく」といった。よめさんは、「おまえさんがそこにながいあいだいるようなら、あなたがかえってきて、わたしは、ここにはいかない」といった。よめさんは嫉妬深かった。男は、「よろしい」といった。男はどんどんあるいていく。男は小川についた。カエルがいない。男は川をわたった。男がすこし川をわたると、なっていたカエルがなきやんだ。男は、「アッラーよ、ここに来たとき、カエルがなっていたのに、川をわたろうとする」と、カエルはなきやんでまった。どうしてか。理由がないわけがない。まあよい」といった。

さて、そこにバオバブの木があった。そのしたに洞穴のあるアリ塚がある。

さて、男はいくと、その洞穴のなかにはいつて、杖をもつてすわった。ほんとうのこと、人狩が男をつかまえて、うりはらつてやろうと、男のあとをつけていた。人狩も川をわたった。人狩は口髭と顎髭をもっている。口髭はひねつてある。人狩はくろい半ズボンをはいて矢筒をもっている。地面にはアンドロポゴンの種がおちている。人狩はながい帽子をきている。人狩はさきのほうをあるいていった。人狩ははしっている。人狩は男が木のしたの洞穴にはいったところまでやってきた。人狩は、「アッラーよ、そこで人をみた。あいつはどこできたのだろう」といった。

さて、人狩は、「なんと足のはやいやつだ。いい。あいつにおいついたら、ひどい目にあわせてやる」といった。人狩はさきのほうにはしつていった。ひよつとしたら、男においつけるのではないかとおもっている。男はアリ塚のなかにいたが、蚊にさされても、じつとしていた。息をこらし、じつとしずかにしている。人狩はどんなさきのほうにはしつていったが、男においつけなかった。男は穴のおくまで頭をすつかりいれることができなかつた。男はそとをみている。アリ塚は道のそばにある。

さて、人狩はやってきて、地団駄をふみながら、「ここで、お金

がにげていった」といった。男はアリ塚のなかにいる。

さて、人狩が、「あいつをルツゲレ・サデイ村につれていくところだったのに。たぶん、もどっていったのだろう。あちらのほうにはしって行ってやる」といった。人狩は村のほうにはしっていった。人狩は男においつけなかった。人狩はもとの場所にもどってきて、たちどまった。人狩は、「ここで、人の臭いがする。そいつの姿がみえない。どうしたのだろう。全能のアッラーよ。それなら、さきにいるのだ」といった。風が男の臭いをはこんでくるのだ。人狩はさきのほうに力一杯はしっていった。人狩はとおくにはしっていくと、男はアリ塚からでた。男はどんだんはしっていった。男は川についた。

さて、男は服をきたまま水のなかでこけた。男は杖をそのままにしておいた。男は川をわたった。男は小屋につくと、戸をたたいた。よめさんが男に、「どうしたの。どうしたの」といった。よめさんは、「きつとなにかに屋敷までおいかえされたのさ」といった。よめさんはたちあがり、小屋のそとにでて、叫び声をあげた。男も、「よめさんは、いったい、どうしたのだろう」といった。男は小屋のなかにはいった。女は小屋のそとにでてきた。女は屋敷からでて、そとにやってきましたとさ。

お話は、おしまい。

(一九六九―七〇年、語り手 パーサーウオ村出身のアブドゥル

ラーイ・オスマース、マルアにて)

